

セリーヌの3つの〈バガテル〉

木下, 樹親

<https://hdl.handle.net/2324/19438>

出版情報：フランス文学論集. (32), pp.1-14, 1997-11-20. 九州フランス文学会
バージョン：
権利関係：



セリーヌの3つの〈バガテル〉

木 下 樹 親

「われわれはセリーヌにかんして堂々巡りするのをやめるべきである」¹⁾。セリーヌのプレイヤッド版『小説集』全4巻の校訂をおこなったアンリ・ゴダールは近年の著作をこのようなことばではじめている。この「堂々巡り」とはひとことでいえば、文学と倫理との葛藤のドラマにはかならない。すなわち、ブルーストやジョイスにも比較される文学言語の刷新者としてフランス文学史上、20世紀文学史上に大きな足跡を残した小説家という評価と；反ユダヤ主義かつ親ドイツ的言辞をあからさまに主張して戦犯に問われた誹謗文書作家という非難、この2つの立場からの議論がこれまで幾度となく交わされ、彼はいわば現代文学のアポリオのようにみなされてきたのだ。今でこそ、セリーヌを人類への冒涇者とみなし、文学的評価をくだす以前に倫理的判断のみで頭ごなしに断罪する人々は少なくなった。とはいうものの、たとえば、いきいきとした民衆言語で鋭い人間省察を展開した『夜の果てへの旅』のセリーヌを絶賛しながらも、歴史の被害者たるユダヤ人を口角泡を飛ばす勢いで罵る3つのパンフレットのセリーヌには不快感を禁じえず、その結果、全体的な評価を留保する人々が多いのも事実である²⁾。もちろん文学と倫理はかならずしも同じ土俵にのせられるものではない。しかしながら、ナチスドイツによるユダヤ人大量虐殺がまごうことなき現実として歴史に刻みつけられたあとの時代を生きている現代人にとって、セリーヌがその2つの基準を紛糾させ、表現の自由とその限界、作品にたいする作家の責任といった問題をたえず提起する存在であることはたしかだ。ともかく、彼のパンフレ『皆殺しのための戯言』、『死体の学校』、『苦境』は³⁾、問題の引き金であるにもかかわらず、あるいはそうであるがゆえに、小説と比較して研究対象にされる機会が少なかったのだから、それらを精神分析学者エリザベート・ルーディネスコのように「まったく無価値」⁴⁾だと判断して切り捨てるのではなく、詳細に検討する作業こそ重要な意義をもって

いるといえよう。ところで、政治学者アニック・デュラフルは『皆殺しのための戯言』と『死体の学校』が当時のフランスで反ユダヤ主義を活性化させることに貢献したと述べ、プロパガンディストとしてのセリーヌが果たした役割を強調している⁵⁾。たしかにセリーヌは『死体の学校』のなかで『皆殺しのための戯言』を「たんなる普及」[EC, 33]の本と形容しているし、読者へ向けた反ユダヤ主義の提言めいた言説は両作品のいたるところに見うけられるから、彼女の主張を否定することはできない。しかしあえて疑問を呈するならば、セリーヌのそうした啓蒙的ともいえる身ぶりには反ユダヤ主義をつよく肯定しながら、いっぽうでそれをはぐらかす動きが伴っていたといえまいか。このような観点から、本論文ではデュラフルが言及していない作品『苦境』も射程に入れ、3つのパンフレにおけるセリーヌが反ユダヤ主義者たちや読者といかなる関係をもとうとしていたのかを考察し、彼のパンフレが一枚岩の構造をもつものではけっしてなく、さまざまな矛盾を含んでいることをあきらかにしたい。

＊

まず3作品の書誌的事実とおもなテーマを簡単にまとめておこう⁶⁾。最初の作品『皆殺しのための戯言』は1937年12月にドノエル書店から出版された。じつはセリーヌはその1年前に反共産主義文書『メア・クルパ』を出版しているので⁷⁾、2作目のパンフレということになる。これは概括的だった『メア・クルパ』の続編でもあり、反ロシア色のつよい章が多いが、ユダヤ人の実態（と称するもの）を暴露する攻撃やフランスの墮落した現状告発など、つづく2冊のパンフレで展開されるテーマをすべてそなえた作品である。つぎに、38年11月に同じくドノエル書店から出版された『死体の学校』ではセリーヌはいっそう過激になり、反ユダヤ主義を上まわる人種主義とドイツとの同盟による絶対的反戦論を強調している。この辛辣さゆえに、出版主ロベール・ドノエルは著者の同意を得て翌年5月、マルシャンドー政令に従うという名目でこの作品を『皆殺しのための戯言』ともども出版停止扱いにし、店頭から回収させた。そのうえ『死体の学校』でユダヤ人リストにくわえられた非ユダヤ医師ピエール・ルーケスが名誉毀損でセリーヌとドノエルを提訴したため、両者は法

廷に立たされ、結局、罰金と該当箇所の削除を求める判決が下されている。その1年後、セリーヌにとってとりわけ重要な意味をもつできごとがおこった。40年6月、ナチスによるパリ陥落後のフランス政府の潰走である。小説『ギニョルズ・バンド I』冒頭のはげしい爆撃シーン⁸⁾へと結実するこの事件をはじめて題材にしたのが、最終パンフレ『苦境』であった⁹⁾。これはヌーヴェル・ゼディシオン・フランセーズ社（占領後にドノエルが出版業を再開したさいにもちいた社名）から41年2月に出版されている。『苦境』は3作品のなかでもっとも分量の少ないパンフレだが、文体的完成度はもっとも高く、屈辱的な敗北を喫したフランスへの痛罵としかいいようのない攻撃に満ちあふれた作品である。そのため同年12月、ヴィシー政府はこの作品を非占領地区で発売禁止処分にした。さらに占領下のできごととして、『死体の学校』が42年10月に14枚の写真入りで、『皆殺しのための戯言』が43年10月に20枚の写真入りで、ともに初版より小さな活字組みで再版されている¹⁰⁾。

はじめにセリーヌのユダヤ人観をまとめておきたい。結論からいえば、その根幹をなす部分に真新しい主張はなにもないといわざるをえない。特徴的な文章を各パンフレからひとつずつあげてみよう――

逆らうだと？ どうやって？ どうして？……ユダヤ人どもが世界中の金をみんな所有してるってのにどんなへりくつこねくりまわしたら連中が権力を握ろうとしてないなんていえるんだ？……全権力を？ いともたやすく？……世界のユダヤ化に刃向かうなんぞ、ちっぽけなじょうろでヴェスヴィオ火山の火を消そうとするようなもんさ。[BM, 253]

ユダヤ人てのは、人種的には、化け物で、消滅すべきで損ないの、引きつった雑種だよ。やつらが闇取引するもの、ひそかに企むものはみんな、呪われてる。人間として飼育したって、はったりかますんなら別だけど、あいつらは壊疽にかかって、なんでもボロボロにしちまう、腐りきった私生児どもにすぎん。ユダヤ人がアーリア人から迫害されたなんてことが一度だってあるもんか。自分自身で迫害してんのさ。[EC, 108]

かつてないほど街頭にユダヤ人がうようよ、かつてないほど出版業界にユダヤ人がうようよ、かつてないほど弁護士業界にユダヤ人がうようよ、かつてないほどソルボン

ヌにユダヤ人がうようよ、かつてないほど医学界にユダヤ人がうようよ、かつてないほど演劇界に、オペラ座に、フランス座に、産業界に、銀行業界にユダヤ人がうようよ。パリは、フランスはかつてないほど傲慢不遜なフリーメーソンとユダヤ人にかつてないほど掌握されてる。[BD, 44]

つまり、劣等人種であるにもかかわらず、ユダヤ人は経済力にものをいわせて世界支配の陰謀を企てており、しかもフランスのあらゆる分野をすでに牛耳っている——この種の主張が3作品をとおしてくりかえされているにすぎないのである。少なくともそのかぎりにおいて、セリーヌは『ユダヤ的フランス』の著者エドワール・ドリュモンをはじめとする近代フランスの伝統的な反ユダヤ主義の文脈に位置づけられよう。じじつ、彼は『死体の学校』でドリュモンを先達のひとりとして認めている¹¹⁾。ところが、セリーヌにはそういった一般的反ユダヤ主義を踏襲しているようで、それをパロディー化する態度が備わっていたように思われるのだ。もちろん人種の優劣や陰謀の存在をまことしやかに語ることにたい、反ユダヤ主義のいかがわしさを如実にあらわす証拠だといえるのだが¹²⁾、セリーヌのばあい、問題は内容よりむしろ操作のしかたにある。以下、3作品を順次たどってみたい。

まず『皆殺しのための戯言』を開くと、おびただしい数の引用に気づく。タルムードからの抜粋、親ユダヤ派の新聞記事、その他、さまざまなエピソードや統計が、先述したパンフレットの根幹をなす主張を傍証し、反ユダヤ主義の正当性を強調するための資料としてちりばめられているのだ。一見するとセリーヌの博識に驚かされるのだが、じつは出版後まもなく、人民戦線の信奉者で対反ユダヤ主義国際同盟のメンバーであったジョルジュ・ゼラーファによって、多くの引用がちまたで出まわっていたいくつかの小冊子からの孫引きにすぎないことが暴露されている¹³⁾。そもそも、不確かな情報を適当にコラージュして小冊子を乱造するのは反ユダヤ主義三文文士たちの常套手段であり、セリーヌは軽々しくかつ大胆に彼らを手本にしたわけである。しかもばあいによって、彼は自説につごうのいい改竄さえおこなっている。その具体例については、ゼラーファを受けて作品全体にわたって典拠を綿密に特定したアメリカ人ファシズム研究家アリス＝イエーガー・カプランの労作があるので詳述は避けるが¹⁴⁾、ひとつだけ、「パリ・ソワール」紙に掲載されたユダヤ系のデルラン

ジェー族についての記事からの引用で、家族の姓名をユダヤ人を即座に想起させる典型的な名前にすべて変更したうえ、ユダヤ人の好色ぶりを示唆する原文にない一文を捏造してくわえた事実をあげておこう¹⁵⁾。ともかく引用にかんするセリーヌの態度は不誠実の一語につきる。結果的に読者をだますことになるといっても過言ではない。そのうえ、彼の言説にはひとつの矛盾が生じている。それはつぎの文章を読むとあきらかである――

ユダヤ人どもは世界一の読書家だが、連中の目にとまるもので、役に立ちそうなものはすべて、ユダヤ・プロパガンダに翻訳できるものはなんでも、歌も、小説も、音楽も、ユダヤ化できるものはみんな、剽窃し、漁って、くすねて、たえずユダヤ化しやがる。[BM, 199]

ここでセリーヌは剽窃・盗作をユダヤ人の特徴だと断言している。だがそのようなユダヤ人とは、『皆殺しのための戯言』で引用をずさんにとり扱うセリーヌにはかならないのではないか。換言すれば、このパンフレは彼が攻撃するユダヤ化行為によって成立しているのではないか。こうした不可解な事実がひとつの書物のなかで確認されるのである。反ユダヤ主義を講じながら、それを裏切る姿勢が見られる一例だといえよう。

また、作品全体が嘲笑的で卑しい調子を帯びていることにも注意しなければならない。セリーヌが参照した物書きたちが総じて理性的な書きかたで反ユダヤ主義の明確な論証につとめたのにたいし、彼はあきらかに異なるスタンスに立ち、論証の意図などまるでないかのように感情の赴くまま性的語彙を豊富にもちいてペンを進めるのだ。たとえば――

女王さまみたいになりたいのかねお嬢ちゃん？……世界のトップスターに！ たいへん結構！ だったらレヴィ＝レヴィ氏、またの名をアビシニアのサミュエルさんとも、カルケンシュタインさんとも、ベン・シネマさんともいうが、あのかたの肛門をまずちょいとおしゃぶりしてさしあげなさい、脱肛の痛みを和らげるのさ……ひどく苦しんでらっしゃるからそっとやさしく吸うのだぞ……あのかたがおまえを感じてくれるようにな！……ぐだぐだいうんじゃない！ そこだ！ 歯を立ててつぶすなよ！……栄光はケツの穴にあるのだ！……脂ぎったユダヤ人の、ぐじゃぐじゃ入り組んで、破裂しそうなくらいはれあがった…… [BM, 223]

これは、映画スターを夢見るアーリア女性に映画界の大物ユダヤ人への性的奉仕をうまくすることによって道が開けると語る光景である。このような猥雑で冗談のすぎる文章が頻出するのだ。セリヌは出版後、民衆らしさを出すためにあえてばかげた文章を書いたのだと説明した¹⁶⁾。しかし、反ユダヤ主義の通俗化どころか、効力の希薄化をまねきかねなかったのではあるまいか。じっさい反ユダヤ主義の新聞「ル・グラン・トクシダン」は、『皆殺しのための戯言』を吐き気を催させる本だと評し、反ユダヤ主義者とはこちこちの信心家かごろつきにすぎないという逆批判をユダヤ人たちに許してしまうおそれがあるとして、このパンフレは抜粋でしか読者に推薦できないと記したほどであった¹⁷⁾。またロベール・ブラジャックも、フランス人という同じ「原住民」としてセリヌに共感できるとしながらも、もっと理性的でありたいというきもちを吐露し、全面的な肯定にはいたっていない¹⁸⁾。

このように、『皆殺しのための戯言』は一般の反ユダヤ主義者たちにとってかならずしも留保なしに歓迎できる書物ではなかったのだが、彼らがユダヤ化しているとみなす「文壇」のベストセラー作家による誹謗文書であるから、影響力を無視するわけにはいかず、彼らのプロバガンダ・オフィスでも販売されるようになった。そうした利害関係もてつだって、セリヌは彼らと現実的に緊密な関係をもつようになる。その時期に執筆されたのが『死体の学校』である。したがってこの作品には打算的な側面があり、前作で典拠をかかげることなく参照した同時代の反ユダヤ主義者たちの名前が列挙され、彼らの小冊子が閲覧できるオフィスの住所まで明記されている。それにつづく箇所はこうだ

結論をいうと、私が諸君に教えた反ユダヤ作家たちの本を入手したまえてことさ——5, 10, 15フラン程度の金をおしむんじゃない。あの勇敢なものたちが、諸君の皮膚、人種、自由をまだ守ってくれる現代社会で唯一のものたちが食べていけるようにしてやんなきゃ。〔…〕マルクス主義をがなりたてる愚か者どもはユダヤらしく白痴めいて自殺せんばかりのスローガンをかかげた共産主義の御託を全章ちゃんと暗記してやがる……おまけにあんなに勝ち誇って！ 諸君も勝ち誇ったらどうだい、死ぬ前にちょっとぐらいは。だって結果はいっしょなんだから、気どってみなきゃ。
[EC, 36-37]

ここには、反ユダヤ主義者たちを称賛し、彼らの著作を読者に推薦するセリーヌの姿がうかがえる。しかし、組織の媒介役としてのこの態度は相対化されているといわざるをえない。それは引用文の最後で、マルクス主義者たちに対抗するため、反ユダヤ主義を勉強して「諸君も勝ち誇ったらどうだい」と読者に檄を飛ばすいっぽう、たとえ勝ちどきの声をあげても死ぬ前のわずかな悪あがきにすぎないにつけくわえたことからあきらかである。彼は主義のいかに問わず、スローガンをかかげた示威行動そのものを等閑に付しているのだ。それゆえ、反ユダヤ主義者たちへの歩み寄りにしろ、読者への呼びかけにしろ、彼の真意のほどがあいまいになっているといえよう。

こういうセリーヌ特有の狡猾さは『死体の学校』の中心的なテーマである反ユダヤ的人種主義の表明にも認められる。この見解は彼が懇意にしていた人種学者ジョルジュ・モンタンドンからおもに得たものである⁽¹⁹⁾。そもそも『皆殺しのための戯言』で攻撃されたのは、移民労働者のような貧しい階級の個々のユダヤ人でなく、権力をもったユダヤ人集団であった⁽²⁰⁾。ところが『死体の学校』以降、そのような区別は無意味だと意見を変え、あらゆるユダヤ人排斥のために「パストゥールの完全殺菌のような」[EC, 264] 人種主義を訴えはじめるのだ。そしてセリーヌはこの理由をつぎのように説明する――

人生を耐えがたくするのは精神が倒錯してるやつらだ。連中どこにでも入りこむすきまを見つけやがる。私自身そうとう倒錯したみたいで狂気じみた人種主義者になっちゃった。それもちょっとやそっとじゃないぞ！ 100 パーセントだ！ おまけに共産主義者だ、もちろんユダヤ人抜きだ！

当代、かくも悲劇的な状況では、もはや無関心じゃいられない。選ばなきゃ、倒錯の種類を選択しなきゃならん、おれは悪人だっていうだけじゃだめさ、強靱な信念をもって、残酷なまでに心を狭くしなきゃならん、選択の余地は少ないぞ、アーリアかフリーメーソンか、ユダヤか反ユダヤかだ。そうすりゃ 20 年間笑って暮らせるってもんさ。[EC, 198]

「精神が倒錯してるやつら」とは、アーリア人殺戮のための戦争を画策するユダヤ人と親ユダヤ派を意味する。彼らこそことばの本来の意味で人種主義者だとみなすセリーヌは、その「倒錯」の害毒がおよんだ結果、みずからも彼ら以上の人種主義者になってしまった、あるいはならざるをえないというのだ。も

ちろんこれは敵にすべての責任を転嫁した詭弁であって、反ユダヤ的人種主義を正当化する理由にはけっしてなるまい。また彼は自分の立場が危機的状況下に生じた狂気の産物にほかならないと告白することで、モンタンドンのような学者による理論を形骸化させている。こういった理不尽で容赦ない態度が『死体の学校』の特徴である。これは極右の人々にとっても目にあまるものだったようで、たとえば対独協力者としてのちに死刑判決を受けるリュシアン・ルバテは、「ジュ・スイ・パルトゥ」編集部のセリーヌ愛好家たちでさえこのパンフレには顔を覆い肩をすくめ、著者が偏執狂でアナキストになったと困惑するようすを述懐している²¹⁾。

『死体の学校』からかいま見えるセリーヌは、反ユダヤ主義や人種主義を標榜する人々と交流を深めつつも、けっして共闘せず²²⁾、また彼自身「フェルディナント野郎はキチガイだ、なんにもわかっちゃいない、といわれたってまるでかまわないね」[EC, 124]と開きなおっているように、狂乱的な発言をくりかえすことで、逆にこれらの主義の本質ともいえるうさんくさをあらわにしたと要約できよう。このような矛盾する態度は、『夜の果てへの旅』以来、彼が大前提であるかのように表明しつつけたきわめて悲観的な世界観・人間観にもとづくものだといえる²³⁾。彼はふたたび大規模な戦争へと突入する時代のまっただなかであらゆる価値への不信感をいっそう募らせているのだ。それゆえ読者への提言にしても、屈折した虚無的なまなざしを見ないわけにはいかない。そのことを最終パンフレ『苦境』で確認したい。『苦境』は3つのパンフレのなかでもとりわけ明瞭に構成され、物質主義化した社会を批判する前半とその危機をのり越えるための提案からなる後半の2つの部分におおむね分けられる。セリーヌは、労働者とブルジョワが同じコインの表裏にすぎず、金持ちになるかそれにとどまるかしか考えていないと分析し、職種を問わず賃金の統一化を断行して公平な社会を築く必要性を力説する。これが『苦境』でもっとも有名な「ラビッシュ式共産主義」である。セリーヌ研究者のなかには、この提案などから社会問題の真摯な考察を導き、『苦境』の肯定的な理解を試みる人もいるのだが²⁴⁾、はたしてそれほど単純なものであろうか――

本格的な共産主義なんか必要なし、連中なにひとつ理解しないからね、ラビッシュ式共産主義が必要なのだ、プチ・ブルの共産主義がね、[BD, 137]

セリーヌは、ロシアの共産主義のように仰々しく難解な理論を並べても民衆の理解は得られないから、ラビッシュ劇のように大衆的で平易な内容の共産主義を訴えるべきだと断言する。しかしすでに『皆殺しのための戯言』で、資本主義国家同然の搾取がまかりとおるロシアの現状をユダヤ人の支配による墮落だとみなしたセリーヌは、共産主義をおこなうにしても、「だがユダヤ人ども抜きでだ、あいつらといっしょになんてとんでもない」[BM, 82]と述べていた。この考えは『死体の学校』でも継承され、本論前々頁の独立引用文に「ユダヤ人抜きの」とあるとおりだ。結局、これらを具体化したものが「ラビッシュ式共産主義」なのである。したがって社会の平等化をいくら明快に説いても、ユダヤ人排除を絶対条件にかかげる以上、彼の共産主義は発想の原点からして偏見に満ちた利己主義のそしりを免れえないであろう。さらにこの引用文で注意しなければならないのが、「プチ・ブルの共産主義」といい換えた点である。セリーヌにとって「プチ・ブル」とは、第2長編小説『なしくずしの死』で執拗に描いた、20世紀の科学の進歩によって没落を余儀なくされた階級にほかならない。小説における彼らはすべて、たとえば、手織りのレース製品を商う主人公の母が機械織りの安価な大量生産品のために販売不振に陥り苦悶の極致に達するように、時代の流れに逆行することの困難を強いられ、人々から顧みられず、おぞましい容貌で生きながらえる存在として提示された²⁵⁾。そのような描写を考えあわせると、「プチ・ブルの」という表現そのものに、「ラビッシュ式共産主義」の実現不可能性と、このことばをあえてもちいる作者の現実世界にたいする諦めにも似た心境が読みとれるように思われるのである。じっさい、セリーヌは「ラビッシュ式共産主義」を実行したさいのシミュレーション対話の箇所、不満をいう相手に、その世界が「ユートピアのまったなか」で「四次元」[BD, 179]だと語らせている。

以上、駆け足で検討した3つのパンフレにおけるセリーヌの態度は『死体の学校』で「世界でもっとも金で買えない人間」[EC, 299]だと自称したことを裏づけるものである。一般の反ユダヤ主義者たちにたいしては、彼らから知識を得たにもかかわらず同列に扱われるのを拒否し、また読者にたいしては、意見の共有を求めるといふより絶望感をいだかせる。彼の姿勢は徹底した悪意に貫かれている。セリーヌは『皆殺しのための戯言』の出版直前に『夜の果て

への旅』の英訳者ジョン・マークスにあてた書簡で、このパンフレの目的が「私への情け容赦ない敵をたくさん作ること」²⁶⁾だと記したが、彼の意図は全パンフレに敷衍され、そして実現したといえるだろう。そのような悪意をばらまくセリーヌの姿をもっともよくあらわしていると思われるのが、『苦境』からのつぎの引用である。本来、ジャーナリズムと読者への攻撃だったものがしだいにあらゆる人々へのそれへと高ぶるようすがうかがえよう――

おまえら私生児の群れにいとくが、もう「地獄」でしかうまくいかないぜ！ 嘘で塗りかためた蠅の糞ども！ 「美術批評家ども」め！ さてほんのちょっぴり幕開きだ！ こいつが私のささやかな慰めでね。あんたら切符は買わなくていいよ！ みなさんがたのために拷問が待ってるんだ！ ユダヤ人もその下僕も！ 油断もすきもない百姓も、裏切ったアーリア人も！ 癪病のアラブ野郎も！ 社交界の痴れ者も！ てめえらみんな一山に盛って！ いっしょくたの腐れ肉さ！ とろ火で炙り！……大火山に乗っけて！ 凍りつくような真実の竜巻におっ放りこんで！ ひとり残らず粉々にしてやる…… [BD, 26]

作者は「地獄」という芝居小屋の前でその拷問劇に参加させる敵たちを集めるためにあらゆる悪態をつく道化師を演じているのだ。この「客寄せのために芸人が小屋の入り口でしゃべり散らす口上」²⁷⁾という意味において、セリーヌのパンフレを本論の題にかかげた〈バガテル〉、正確に言えば«*bagatelles de la porte*»と形容できるのではないだろうか。

＊

セリーヌは戦後の裁判に提出した弁護趣意書に「私は1937年以来、反ユダヤ的なことを1行たりとも書いたおぼえがない」²⁸⁾などと平然と記したため、レジスタンス側からもちかつての対独協力者たちからも無責任ぶりを厳しく糾弾された。しかしながら、彼がパンフレに触れたくないきもちとは裏腹に、戦後に発表された小説『またの日の夢物語Ⅰ』や〈ドイツ3部作〉における、敵の存在を意識し、彼らと戯れるかのように濃密な罵倒を展開するスタイルがパンフレの執筆を経験したからこそ完成されたことはまちがいない。もちろん執筆過程のちがいもあり、パンフレと小説を同等にあるいは前者を後者の上におい

て論じることはできないが²⁹⁾、パンフレがその後の小説に及ぼした影響を無視することはできない。個々のパンフレの細部について検討すべき余地が残されていることをつげくわえて、ひとまず本論を締めくくろう。

註

- 1) Henri GODARD, *Céline scandale*, Paris : Gallimard, 1994, p. 17.
- 2) おもにサルトルをはじめとする実存主義のグループや左翼系の批評家がシリーズをこのように判断した。
- 3) Louis-Ferdinand CÉLINE, *Bagatelles pour un massacre*, Paris : Denoël, 1937 ; *L'École des cadavres*, Paris : Denoël, 1938 ; *Les Beaux draps*, Paris : Nouvelles Éditions Françaises, 1941. 引用は拙訳で、作品の略号（それぞれ BM, EC, BD）とページ数を [] 内に示す。なお、*L'École des cadavres* と *Les Beaux draps* にかんしては、長田俊雄訳『死体派』、国書刊行会、1980 年、磯野秀和訳『苦境』、国書刊行会、1982 年を参照した。
- 4) Élisabeth ROUDINESCO, « Entretien avec Élisabeth Roudinesco (Le Docteur D. et l'invasion microbienne) », in *Les Lettres Françaises*, novembre 1991, 「D 博士と病原菌侵入」, 赤間啓之訳、『ユリイカ』1994 年 10 月号所収, 青土社, 204 頁。
- 5) Annick DURAFFOUR, « Céline propagandiste », in *Politiques*, n° 2, Paris : Éd. Quai Voltaire, 1992, pp. 89-98.
- 6) 3 パンフレの書誌について、詳しくはつぎの資料を参照されたい——Jean-Pierre DAUPHIN et Pascal FOUCHÉ, *Bibliographie des écrits de Louis-Ferdinand Céline 1918-1984*, Paris : Bibliothèque de Littérature française contemporaine de l'Université Paris 7, 1985, n° 37A1, 38A1 et 41A1 ; *Céline & les Éditions Denoël 1932-1948*, correspondances et documents présentés et annotés par Pierre-Édmond ROBERT, Paris : IMEC, 1991, pp. 106-108, 123-125, 130-132 et 141.
- 7) Louis-Ferdinand CÉLINE, *Mea culpa* suivi de *La Vie et de l'œuvre de Philippe-Ignace Semmelweis*, Paris : Denoël et Steele, 1936.
- 8) Louis-Ferdinand CÉLINE, *Guignol's band I*, in *Romans III*, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1988, pp. 87-94.
- 9) シリーズはベルギーの女流作家エヴリーヌ・ポレにあてた書簡で、『死体の学校』を『皆殺しのための戯言』の続編と位置づけ、前者をもって論争的な文書は終わりとすると記していた (voir les lettres à Évelyne Pollet, du [15 septembre 1938] et du [février 1939], in *Cahiers Céline 5*, textes réunis et présentés par Colin W. NETTELBECK, Paris : Gallimard, 1979, pp. 199 et 202)。その考え

に反して『苦境』に着手せざるをえなかった背景に、潰走による衝撃があったと考えてさしつかえあるまい。

- 10) Louis-Ferdinand CÉLINE, *L'École des cadavres* [rééd.], Paris : Denoël, 1942 ; *Bagatelles pour un massacre* [rééd.], Paris : Denoël, 1943.
- 11) Louis-Ferdinand CÉLINE, *L'École des cadavres*, op. cit., p. 35.
- 12) その最たる例が、『皆殺しのための戯言』のなかで『シオン賢者たちの議定書』にふれた点であろう。この書物はユダヤ人による世界支配陰謀の实在を証明するために反ユダヤ主義者たちがもちいた代表的な資料である。しかしながら、これがモーリス・ジョリによるナポレオン3世批判の文書『マキャベリとモンテスキューの地獄対話』（1864年）をほとんどそのまま下じきにした偽書であることは、1921年に「タイム」誌の記者によってすでに指摘されていた。にもかかわらず、修正主義的な反ユダヤ主義者はその信憑性を認めた論陣を張りつづけたのである。セリーヌも、一読するとはかげた内容に思えるが、世界の変化に照らしあわせるともったもな予言であったと記している（voir CÉLINE, *Bagatelles pour un massacre*, op. cit., p. 277）。だが一般的には、『シオン賢者たちの議定書』にのっとった反ユダヤ主義がまゆつばものだとしか認識されなかったのは論をまたない。
- 13) Georges ZÉRAPHA, « Probité célinienne », in *Conscience des Juifs*, février-mars 1938, pp. 14-18. ちなみにゼラーファが『皆殺しのための戯言』の典拠としてかかげた文書はつぎの3点である。H. de VRIES DE HECKELINGEN, *Israël, son passé, son avenir*, Paris : Libr. Académique Perrin, 1937 ; Henri-Robert PETIT, *Le Règne des Juifs*, Paris : Centre de Documentation et de Propagande, 1937 ; Joseph SANTO, *La Prochaine Révolution des travailleurs*, Paris : Centre de Documentation et de Propagande, s.d.
- 14) Alice Yaeger KAPLAN, *Relevé des sources et citations dans «Bagatelles pour un massacre»*, Tusson : Éd. du Lérot, 1987.
- 15) CÉLINE, *Bagatelles pour un massacre*, op. cit., pp. 263-264 ; KAPLAN, *ibid.*, pp. 184-187.
- 16) Voir la lettre à Henri-Robert Petit, du [août ? 1938], in *L'Année Céline 1994*, Tusson : Éd. du Lérot / Paris : IMEC, 1995, p. 76. ブチは、『皆殺しのための戯言』出版後、セリーヌが交流しはじめた反ユダヤ主義者のひとりである。セリーヌは彼から反ユダヤ主義小冊子の情報を得たり、彼に人種学者ジョルジュ・モンタンドン（後註19参照）を紹介したりした。また上記書簡で、『皆殺しのための戯言』の執筆にあたってブチの著作を参照したことを認めている。
- 17) « *Bagatelles pour un massacre* : Morceaux choisis », in *Le Grand Occident*, n° 34, mars 1938, cité par KAPLAN, op. cit., p. 93.
- 18) Robert BRASILLACH, « L. - F. Céline : *Bagatelles pour un massacre* », in *L'Action française*, 13 janvier 1938, reproduit dans *Les Critiques de notre temps et Céline*, présentation par Jean-Pierre DAUPHIN, Paris : Garnier

Frères, 1976, pp. 67-70.

- 19) スイス出身のジョルジュ・モンタンドン (1879-1944) は、赤十字の一員としてロシア革命期のシベリアに滞在した経験をもつ医者であったが、のちに人類学者に転向した人物である。30年代後半、彼の民族主義はしだいに人種主義へと変化していき、セリーヌに影響をおよぼした。両者が現実交流しはじめたのは『皆殺しのための戯言』出版後だと思われる。
- 20) セリーヌはたとえば、「私は個々のユダヤ人にはなんら思うところはない、つまりみんなと同じただの浮浪者、2本足でおまんまを探す連中にたいしてはという意味だ……あいつらのせいでいやな思いをしてるんじゃない。ひとりのユダヤ人はひょっとしたらひとりのブルトン人に値するかもしれん、[...] じゃなくて私が頭にくるのはユダヤの人種主義にたいしてなんだ」[BM, 72] と書いていた。
- 21) Lucien REBATET, *Les Décombres*, Paris: Denoël, 1942, p. 137.
- 22) セリーヌは反ユダヤ組織の会合などに出席したことはあったものの、じっさいになんらかの党派に所属して行動することはなく、あくまでも自己の独立性を是とした。これは、42年に反ユダヤの新聞「オ・ピロリ」への書簡で示すことになる、自分はあたえても相手からはなにも受けとらない「絶対的自由コラボ」と称した態度につづるものである (voir «Une Lettre de L.-F. Céline», in *Au pilori*, n° 113, 10 septembre 1942, p. 1, reproduite dans *Cahiers Céline* 7, réunis et présentés par Jean-Pierre DAUPHIN et Pascal FOUCHÉ, Paris: Gallimard, 1986, p. 171)。彼を現実的な対独協力者たちとひとくくりにして論じられない理由がここにある。
- 23) セリーヌの絶望的な価値観を簡潔にあらわすのが、「真実とは、終わることのない苦悶である。この世の真実は死だ」という『夜の果てへの旅』におけるもっとも有名なアフォリズムである。Voir Louis-Ferdinand CÉLINE, *Voyage au bout de la nuit*, in *Romans I*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1981, p. 200.
- 24) たとえばイギリスのセリーヌ研究家マーリン・トーマスは、3パンフレに一貫する医療、環境、教育、メディアなどの矛盾や不正にたいするセリーヌの憤りを一般的に容認できる意見だとみなす立場に立つ。ただし、悪の責任をすべてユダヤ人に帰す作者の態度を留保し、罵倒的にもちいられる「ユダヤ人の」に類する修飾語句をあえてとり除くというごまかしをしたうえでこの判断が導かれたことをトーマスは認めている。Voir Merlin THOMAS, «Quelques thèmes sociaux des pamphlets de Céline», in *Australian journal of french studies*, vol. XIII, n° 1-2 (Actes du colloque international d'Oxford 22-25 septembre 1975), pp. 118-125.
- 25) この点については、拙論『『なしくずしの死』における〈進歩〉と懐古趣味』、『ステラ』第11号、九州大学フランス語フランス文学研究会、1992年6月、93-104頁を参照されたい。

- 26) Lettre à John H. P. Marks, [octobre 1937], in *Textes et documents 3*, réunis et présentés par Jean-Pierre DAUPHIN et Pascal FOUCHÉ, Paris : Bibliothèque de Littérature française contemporaine de l'Université Paris 7, p. 91.
- 27) Alain REY et Sophie CHANTREAU, *Dictionnaire des expressions et locutions*, Paris : Le Robert, 1989, p. 67.
- 28) CÉLINE, «Mémoire en défense», in *Cahiers Céline 7*, op. cit., p. 246.
- 29) パンフレの生成学的考察で博士論文を提出したレジ・テッタマンズィは、たび重なる文体推敲をへて完成された小説に比較して、しばしば下書きのような状態にあるパンフレをシリーズ作品の頂点におくべきではないと述べている (voir Régis TETTAMANZI, « Étudier les pamphlets », in *Magazine littéraire*, n° 317, janvier 1994, p. 51)。また、ゴダールもパンフレを小説の副産物だとみなす立場に立つ (voir GODARD, *Céline scandale*, op. cit., p. 125)。

(九州産業大学非常勤講師)